The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Linearization and Morphological Merger: A Study of the Reason Wh-phrase Nani-o
Author(s)	飯田, 泰弘
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73490
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　飯田　泰弘　）	
論文題名	Linearization and Morphological Merger: A Study of the Reason *Wh*-phrase *Nani-o* （ 線形化と形態的併合：理由を尋ねるWh句「なにを」に関する研究 ）

論文内容の要旨

本論文では、日本語の理由を尋ねるWh句「なにを」が持つ三つの特性に対して、Shibata (2015) が提案した「形態的併合 (morphological merger) による複合主要部形成 (complex head formation)」のもとで、新しく考察を行った。

1章では、まず「なにを」が持つ特異な振る舞いの中でも、本論文が統一的な説明を試みる現象を明確に示した。それはすなわち、理由のWh句「なぜ」とは異なり、「なにを」は、①目的語に対して語順の制約を持ち、②否定文に生起できず、③分裂 (cleft) 構文や間接疑問文削除 (sluicing) 構文に生起できない、という三点である。これらに対応する実例の (1a-d) はすべて非適格文になるが、一方で、下線部を「なぜ」に変えるとすべて適格文になる事実がある。

(1)　a. * 変な歌ばかりなにを歌っているの。(cf. なにを変な歌ばかり歌っているの。)

　　b. * なにを騒いでいないの。

　　c. * 彼らが騒いでいるのはなにをですか。[分裂構文]

　　d. * トムが漫画ばかり読んでいるが、僕はなにをかわからない。[間接疑問文削除構文]

本論文で採用するShibata (2015) の枠組みの要点は、以下である。日本語では、「食べ＋な＋かった」のように、動詞や否定辞や時制辞といった複数の要素が結合するが、このような複合主要部の形成が（日本語の）文の生成メカニズムのどの段階で行われるかについては、統語部門や音声形式など様々な可能性が指摘されており、未だ統一的な結論に至っていない。そのような中でShibata (2015) は、形態部門における形態的併合によるものであると主張した。このシステムに従えば、「食べなかった」という結合に必要になるのは、関係する（動詞や否定辞や時制辞の）主要部同士の構造的隣接関係である。もしも隣接関係を壊すような顕在的介在物がある場合は、形態部門に文構造の情報が着く前に、(2a) のように、TPよりも上の（仮にXPと呼ぶ）位置への移動が義務付けられる。逆に、介在物が低い位置に残った場合は、(2b)のように各主要部同士の結合が妨げられ、非適格文を導くことになる。

(2)　a.　$[_{CP}\ [_{XP}\ [_{XP}\ [_{TP}\ [_{(NegP)}\ [_{vP}\ \alpha\ [_{VP}\ \beta\ V\ ]\ v]\ Neg\ ]\ T]\ ]\ ]\ ]$

　　b. * 太郎は米を[食べ今日なかった]。

このような枠組みで「なにを」を分析するにあたり、2章ではまず準備的観察として、先行研究 (Kurafuji 1996, 1997, Ochi 1999など) をもとに「なにを」の特徴的な性質を概観した。特に注目したのは、「きのう何を食べたの」のような主に他動詞の目的語を尋ねる「何を」とは異なり、理由を尋ねる「なにを」はWh付加詞であること、また、（驚きや怒りなど）話者の感情を常に含意するが、感嘆や修辞疑問のWh句ではなく、疑問のWh句として機能するということである。これらをもとに、「なにを」にはWh素性とAtt(itude)素性が備わっているとし、とりわけAtt素性はTPの上にあるAttPで認可される派生を提案した。さらにOchi (1999) の主張に従い、「なにを」の基底生成位置はVP付加位置であると仮定した。

3章では、これまでの観察や仮定をもとに、本論文の一点目の分析対象である「なにを」の語順制約、すなわち、(1a) で例示したように、線形語順において「なにを」は直接目的語よりも先行しなければならない点を考察した。この語順制約には、Konno (2004, 2005) や高見 (2010) などの先行研究がある。しかし、Konnoは彼が「何ヲXヲ構文」と呼ぶいわゆる他動詞文では、「なにを」は疑問の意味を持てないという事実と異なる前提で論を展開しており、一方で、高見は他動詞文の基本語順を基にした説明を提案しているが、これにも畠山他 (2012) が指摘するような反例が存在する。本論文ではこれらを踏まえ、まず重要なことは、「なにを」の語順制約が起こる環境をより正確に把握することであることを指摘し、細かな再調査を実施した。その結果、「なにを」は目的語以外にも、動詞の補部位置に生起する前置詞型の項との間にも語順制約を持つこと、一方で、主語や「なぜ」には比較的自由な語順が許されることを示した。

しかし、Shibata (2015) のシステムだけでは、この事実が正しく予測できない。なぜなら、低い位置に基底生成され

る「なにを」や目的語は、形態的併合を妨げないために(3)のように上昇するが、移動先での位置関係に関する規定は無いため、目的語のほうが「なにを」よりも先行する線形語順さえも誤って容認してしまう可能性が残るためである。

(3) [$_{CP}$ [$_{XP}$ [$_{TP}$ [$_{(NegP)}$] [$_{vP}$ [$_{VP}$なにを [$_{VP}$ 目的語 V]] v] (Neg)] T]]]

よって本論文が採用したのは、Fox and Pesetsky (2005) のOrder Preservationである。これは、排出 (Spell-out) ドメインごとに、そのドメイン内の語順が固定されるという考え方であり、本論文では、VPを排出ドメインの一つと想定することで、(4)のように「なにを」が目的語に先行する語順のみを確定できることを示した。

(4) [$_{CP}$ なぜ [$_{TP}$ [$_{vP}$ 主語 [$_{VP}$なにを[$_{VP}$ 目的語 V]]]]]

加えて、(4)から分かるように、この分析を用いれば、***v***P位置の主語や、Ko (2005) に従いCP位置に生起すると仮定する「なぜ」のような、高い位置の要素には語順制約がないことも自然に捉えることができた。

4章の前半では分析をさらに、二点目の研究課題である「なにを」が否定文に生起できない事実に拡張した。本論文の説明方法は、Kurafuji (1996) に基本的に従うものであり、すなわち(1b)の非適格性の原因は、否定の島 (negative island) によるものとする。これはShibataのシステムでは自然に予測できることで、(3)で示したように、否定辞も複合主要部形成の一部であるため、「なにを」がXPに上昇する際には必ずNegPを通過する。よって、Wh付加詞である「なにを」が弱い島 (weak island) とされる否定の島を越えるゆえに、非適格文が生まれるのである。

4章の後半では、否定の島の現象に関連して導き出せる、「なにを」のさらなる二つ特性を議論した。一つ目は、Kuno and Takami (1997) が指摘した、否定の島の現象を回避する例外的なWh句を取り上げ、「なにを」は談話に連結されていない (non-D(iscourse)-linked) Wh句の性質を持つことを指摘した。具体的には、通常は否定の島の影響を受けるWh句が、談話に連結された (D-linked) Wh句になると、抜き出しが可能になるという報告をもとに、本論文ではこの種の談話に関係する情報は、追加的な素性（仮に素性βと呼ぶもの）としてWh句に与えられ、追加的素性βを持つWh句は島の影響を回避できるという分析 (Starke 2001など) を採用した。この追加的素性βの現象を日本語に応用したEndo (2007) は、理由を尋ねる「なにを」はこのβを持つことができないため、島の影響を例外なく受けると主張している。これらをもとに本論文では、「なにを」は談話に連結されていないWh句の性質を持つと結論づけ、独立的に同様の指摘をしているNakao (2008) の主張を支持した。

二つ目の特徴は、Fijii *et al.* (2014) の「なんで」の分析と関係する。彼らは「なんで」には、理由を尋ねる機能と、道具・手段を尋ねる機能があると指摘し、前者の範疇はAdvPであり島の影響を受けるが、後者はNPを内部に含んだPPであり、島の影響を受けないという一般化を行っている。本論文では「なにを」にも同様の分類を行い、理由を尋ねる「なにを」はAdvPで島の影響を受け、一方で、動詞の目的語を尋ねる「何を」はNPであり、よって島の影響を受けないものとした。この分類は、これまで付加詞と項の違いで説明されてきたものを、新しく範疇でも「なにを」を二つの機能に分類できる可能性を示したものである。さらにこの分類に関連して、理由を尋ねる「なにを」の「を」は、構造格でも (Kurafuji 1997)、 内在格でも (Ochi 1999, Nakao 2008) なく、「なにを」という語彙の一部であるという主張を行った。

5章では、まず前半で本論文の最後の問いである、「なにを」が分裂構文や間接疑問文削除構文に生起できないという、(1c)と(1d)の非適格性について議論した。具体的には、「なにを」文のCP位置には、英語の感嘆文のように(Zanuttini and Portner 2003)、叙実演算子 (factive operator) があると仮定した。そして、日本語の分裂構文では、焦点要素と同一指標をもつ空演算子が前提節内にあり、それが前提節のCP指定部に移動するという分析 (Matsuda 1997など) を採用し、また、間接疑問文削除構文においても同様の空演算子移動を用いる分析 (Kizu 2005など) を採用した。なお、これらの空演算子の移動先となるCPに既に叙実演算子がある場合は、Zanuttini and Portner (2003)が感嘆のWh句で提案した(5a)の移動のように、空演算子のほうが高いCP指定部に移動することを仮定した。

(5) a. [$_{CP}$ Excl-Wh [$_{CP}$ Fact-Op [$_{TP}$ ...]]] b. [$_{CP}$ Op [$_{CP}$ Fact-Op [$_{TP}$ ...]]]

(5a)の感嘆文の場合は、Zanuttini and Portner (2003)によるとWh素性を持たない要素の移動であるため、叙実的島 (factive island) による影響はないとされている。一方で、「なにを」を含む分裂構文や間接疑問文削除構文における空演算子移動の場合は、疑問のWh句と対応する要素の移動であるため、本論文では(5b)のように、叙実的島により移動が妨げられるという主張を行った。よって、「なにを」が分裂構文と間接疑問文削除構文に生起できない理由は、いずれも空演算子の移動の際に起こる島の影響で統一的に説明が出来ることになった。

5章の後半ではまた、「なにを」と感嘆のWh句「なんて」との比較を行った。この両者はともに話者の感情を表すWh句ではあるが、大きな違いとして、互いに相手が持つ素性を一つ欠いていることを指摘した。すなわち、「なにを」にはWh素性があるが「なんて」には無く、逆に「なんて」が持つとされるMood素性 (Ono 2006) は、「なにを」には

備わっていない。さらにこのWh素性とMood素性の有無を、Wh付加詞の「なにを」が持つ「疑問」と「咎め」という二つの機能に広げ、理由を尋ねる「なにを」はWh素性を持つがMood素性が無く、相手を咎めるだけの「なにを」にはMood素性は備わっていてもWh素性は無いと主張した。これはつまり、一つの「なにを」はWh素性とMood素性を同時には持てないということである。この共存が不可能であることは、感嘆のWh句と疑問のWh句が同一文中で使用できないことと同じであり、文のタイプが決められないClause Typing Conditionの違反によるものとした。よって、Wh付加詞の「なにを」の二つの機能は、感嘆のWh句と疑問のWh句と同様に、相補分布の関係であるという指摘を行った。

6章では本論文のまとめとして、(1)で示した「なにを」の特性が統一的に行えるようになったこと、また、本論文はShibata (2015)が主張する「形態的併合による複合主要部形成」を支持するものであることを再確認した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（飯田　泰弘　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	由本　陽子
	副 査　教授	宮本　陽一
	副 査　准教授	越智　正男

論文審査の結果の要旨

飯田泰弘氏の博士学位申請論文 “Linearization and Morphological Merger: A Study of the Reason *Wh*-phrase *Nani-o*”は、以下のような理由を問う「なにを」の統語的振る舞いと分布について、生成文法ミニマリズム統語論の枠組みによって説明しようとしたものである。

(i) 彼らはなにを騒いでいるの？　(ii) ジョンはなにを変な歌ばかり歌っているの？

本論文が提案する分析が依拠するのは、Shibata(2015)が提案する「形態的併合」により、日本語の「食べ＋な＋かった」のような複数の主要部が解釈部門への排出ドメインの一つであるVPの段階で、いったん複雑述語を形成するというモデルに、排出の度に線形語順が固定されていくとするFox and Pesetsky (2005)の仮定を組み入れた枠組みである。

本論文が取り上げている「なにを」の統語的特性は以下の３点である。①直接目的語より後ろに生起できない。②否定文に生起できない。③分裂文(cleft)や間接疑問文削除構文(sluicing)に生起できない。先行研究ではこれらについて統一的な説明がなされているとは言えないが、本論文では、上記の枠組みを用いれば、原理的な説明ができると主張している。論文の構成は以下の通りである。まず、2章において、生成文法における「なにを」についての先行研究を概観し、本論文が扱う「なにを」は、理由を尋ねると同時に話者の感情を含意することから、wh素性とAttitude素性の両方を有すると仮定する。また、生起位置についてはVPの付加位置と仮定するのが妥当であることを証明している。3章では、「なにを」の語順制約①について先行研究の問題点を指摘し、事実を再調査したうえで、上記の枠組みを用いた分析が提案されている。4章では②の「なにを」が否定文に生起できないことについて、「なにを」が形態的併合の要請を満たすべく移動する際、否定の島を越えてしまうことに起因すると提唱し、Kurafuji (1996)を支持している。さらに、談話に連結された(D(iscourse)-linked) 疑問詞が否定の島の効果を示さないことから、「なにを」が談話に連結されていない (non-D-linked) 疑問詞であると指摘している。5章では、「なにを」が示す③の生起制限について、「なにを」文のCP位置に英語の感嘆文と同じく叙実演算子 (factive operator) があると仮定した上で、分裂構文の空演算子がこの叙実演算子を越えて移動することに起因すると主張している。2つの構文の非文法性を統一的に、かつ原理的に説明した飯田氏の分析は、先行研究と一線を画する独創的なものである。また、感嘆文との比較から「なにを」におけるWh素性と法 (mood) 素性は相補分布を示しており、この素性構成の違いが「なにを」の解釈の違いに繋がると示唆している。

本論文では、形態的併合により強制される移動が重要な説明の道具とされているが、その移動の性質について課題が残されている。特に、かきまぜ(scrambling)と同様のものと考えてよいのかについては、より広く他の移動現象との関係を観察したうえで検討する必要がある。また、本論文では「なにを」は一塊の副詞だと主張されており、「を」の機能、性質について不問に付しているが、この点についても再検討が必要である。5章の説明において重要な役割を果たす叙実演算子について

は、その生起は何によって保証され、また、その生起位置は意味解釈上これで良いのか、など、いくつか解明されていない点がある。

以上のような課題が残されているものの、本論文がShibata (2015)の枠組みの妥当性を支持する新たな言語事実を提示し、「なにを」文の分析に新たな風を吹き込んだことは間違いない。以上のことから、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。